

令和 6 年 5 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00042

研究課題名(和文) 誕生肯定の視点による反出生主義哲学の批判的かつ超克的研究

研究課題名(英文) A Critical Study of Anti-natalist Philosophy in Terms of Birth-Affirmation

研究代表者

森岡 正博(Morioka, Masahiro)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：80192780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は反出生主義の一側面である「誕生否定」を、申請者の提唱する「誕生肯定」の視点から批判的に考察するものである。研究成果は以下の5点となった。(1)ベネターの快苦の非対称性の結論をベネターとは別の方式によって導けることを示すことによって、ベネターの議論に比較優位がないことを指摘した。また、誕生肯定概念を心理学的次元および哲学的次元から詳細に規定した。(2)反出生主義の世界思想史を調査研究し、単著として刊行した。(3)ナラティブアプローチによる人生の破断の考察を行なった。(4)アニメイテド・ペルソナの概念の考察を深化させた。(5)国際的議論のプラットフォームの構築に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまで日本では学術的に考察されることのなかった反出生主義について、分析哲学的および思想史的な議論を行ない、その全体像を明らかにできたことである。本研究によって、今後のこのテーマについての研究の基盤が形成されたと言いうことができるだろう。本研究の社会的意義は、若者たちのあいだで語られる「生まれてこないほうがよかった」という考え方や、「子どもは産むべきではない」という考え方を、どのように捉えればいいのかについての枠組みを与えることができたことである。人生に対するネガティブな思想に惹かれる人々が参照できるような研究成果になったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This is a study that critically examines one aspect of antinatalism, "birth negation," from the perspective of "birth affirmation," as advocated by the applicant. The results of the research were the following five points. (1) By showing that the conclusion of Benatar's asymmetry of pleasure and pain can be drawn by a method different from Benatar's, it was pointed out that there is no comparative advantage in Benatar's argument. I also defined the concept of birth affirmation in terms of its psychological and philosophical dimensions. (2) I conducted research on the world history of antinatalist thought and published it as a monograph. (3) I studied the rupture of life through a narrative approach. (4) I deepened the discussion of the concept of animated persona. (5) I contributed to the construction of a platform for international discussion.

研究分野：哲学

キーワード：反出生主義 人生の意味

1. 研究開始当初の背景

申請者は、反出生主義の一側面である「生まれてこなければよかった」という誕生否定の考え方を、申請者の提唱する「生まれてきて本当によかった」という誕生肯定の視座から批判し、誕生否定の思想を超越しようとするものであった。2010年代の終わり頃より、日本においても反出生主義が注目を集め始めており、哲学領域からの対応が求められていた。しかしながら日本語における学術的な先行研究が乏しく、世界の議論のサーベイからスタートする必要があった。そのため、分析哲学における先行研究と、思想的な文献読解を行なうことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、誕生肯定の視点から反出生主義の誕生否定の哲学を批判し、それを乗り越える道を模索するものである。そのために設定した学術的な問いは、(1)「生まれてこなければよかった」とは哲学的に何を意味しているのか？、(2)「生まれてきて本当によかった」という視点から、反出生主義の哲学を超越するにはどうすればよいのか？、の二つである。

3. 研究の方法

まず反出生主義についての先行研究をサーベイするところから始める。デイヴィッド・ベネターによる古典的な文献と、それへの批判として刊行された種々の論文を詳細に検討して、議論の全体像をとらえる。次に、反出生主義に分類されるであろう哲学思想を、古代地中海からヨーロッパに至る思想史と、古代インドにおける思想に探し求め、反出生主義の成立過程をグローバルな視点から明らかにする。そして、誕生肯定の概念がいかなる意味で誕生否定を超越し得るのかを分析的手法によって解明する。

当初計画において、以下の4つの研究を行なうこととした。

(1) 分析哲学における反出生主義の研究・・・ベネターによる快苦の非対称性に関する議論を綿密に検討し、その理論に真の妥当性があるかどうかを考察する。ワインバーグによる出産許可原理がどこまでの妥当性を持っているのかを分析的に検討する。

(2) 誕生肯定の概念のさらなる精緻化と問題点の克服・・・誕生否定には遂行可能性がないが、誕生肯定には遂行可能性があるという着眼点から何が導かれるのかを解明する。と同時に、人生の意味の哲学におけるナラティブアプローチによって、否定的な経験を経て人が肯定的に成長できる可能性を哲学的に基礎づけられるかどうかを検討する。

(3) 反出生主義に関する思想史的研究およびペルソナ体験との接続・・・思想史研究においてはとくにショーペンハウアーとニーチェの生の哲学に着目し、彼らの生の哲学から何を学ぶことができるのかを解明する。20世紀において彼らの哲学を継承したのはフランクルであると考えられるので、フランクルの哲学を検討する。また、死の体験と関連して申請者が提唱しているペルソナ体験との関連性を研究する。

(4) 国際的プラットフォームの構築・・・「人生の意味の哲学」国際会議を中核とした反出生主義研究のプラットフォームを構築する。

本来ならば世界各地で開催される国際会議等に出席して、この分野の哲学者たちとディスカッションをする予定であったが、新型コロナウイルスの流行により海外渡航が不可能となったため、文献研究を中心としながら、適宜オンラインを活用して海外の哲学者たちと研究交流を行なうこととした。「人生の意味の哲学」国際会議のコアメンバーとして、同会議をオンラインで開催し、反出生主義に関する議論に参加することにした。

4. 研究成果

研究は、おおむね当初に設定した4つのテーマに即する形で進行し、成果を出した。当初の想定を超えて研究が進んだものがあると同時に、当初の予定を十分に達成できなかったものもある。それらについて、以下に詳述する。

(1) ベネターの快苦の非対称性の議論に対する批判的研究および誕生肯定概念の分析哲学的研究

ベネターの快苦の非対称性の議論の中核部分である *Better Never to Have Been*(2006)の第2章の前半部分をパラグラフごとに検討し、さらに Benatar (2012), Benatar (2013)におけるベネターの改訂を考慮することによって、ベネターの真意が以下であることを解明した。すなわち、ベネターの議論は intrinsically な直観と relatively な直観からなっており、

Intrinsically speaking

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Bad)	(3) Absence of pain (Neutral)
(2) Presence of pleasure (Good)	(4) Absence of pleasure (Neutral)

Figure 3.

Relatively speaking

Scenario A (X exists)	Scenario B (X never exists)
(1) Presence of pain (Worse)	(3) Absence of pain (Better)
(2) Presence of pleasure (Not better)	(4) Absence of pleasure (Not worse)

Figure 4.

これらの直観を採用した時に、広く認められている4つの非対称性をライバルセオリーよりも良く説明することができるという論証構造をしている。これに対して私は、ベネターの結論をベネター方式とは異なったより簡単な方式で導くことが可能であることを示し、よってベネターの論証が比較優位ではないことを指摘した。このような反論が可能であることはベネターの議論の根本構造に致命的な欠陥があることを示唆していると考えられる。この考察は森岡(2021)「デイヴィッド・ベネターの誕生害悪論はどこで間違えたか」として刊行した。現在、この議論を拡張することでさらに根本的に快苦の非対称性の議論を批判できると考えており、論文を準備中である。執筆が終わり次第、投稿する。

一方、誕生肯定概念については、心理学的次元において、可能世界解釈(仮に私がいまかかえている深刻な問題が解決されている可能世界を想定したとしても、そちらの可能世界のほうに生まれてくればよかったと本気で心の底からは望んだりしない態度)と、反 反出生主義解釈(反出生主義が意味するものをきちんと理解しながらも、あえてそれとは逆の方向に生きていこうとする態度)があり、哲学的次元においてはその二つの解釈の中の「生まれてきたこと」と「生まれてこなかったこと」の比較は不可能である、ということが導かれる。この成果は、Morioka(2021)“What Is Birth Affirmation?”として刊行した。この考察の先には、そもそも誕生とはどのような概念かについての哲学的考察が待っているが、これについては本研究期間中には十分に行なうことができなかった。今後の課題としたい。

(2) 反出生主義の世界思想史および21世紀の反出生主義に関する研究

反出生主義の大きな特徴である「誕生否定」の思想およびそれに類する思想を、古代ギリシア、古代インド、近現代ヨーロッパの思想史において検討した。古代ギリシアにおいては「いちばん良いのは生まれてこないこと、次に良いのは生まれる前の世界に早く戻る」という思想が様々な文献で謳われた。古代インドにおいては、とくに原始仏教の解脱の考え方、つまり輪廻からの離脱によってもうこの世界にも生まれぬことを目指す思想が誕生否定に類するものと考えられる。近代ヨーロッパにおいてこの二つの流れを統合したのがショーペンハウアーである。20世紀になって出産を否定する「出産否定」の考えが本格的に登場し、21世紀になってそれに antinatalism の名称が与えられた。私はこの思想史を単著『生まれてこないほうが良かったのか?』(2020)として刊行した。これは日本で最初の誕生否定の思想史研究の書物である。その後、反出生主義のもうひとつの大きな特徴である出産否定の全体像を概観し、論文「反出生主義とは何か」(2021)として刊行した。この二つの研究によって、反出生主義の全体像を把握するという研究計画は達成されたと考えている。

(3) ナラティブアプローチによる誕生肯定の研究

ナラティブアプローチを用いて誕生肯定の本質について考察する試みを行ない、Morioka(2022)“Is It Possible to Say ‘Yes’ to Traumatic Experiences?”として刊行した。この論文で私は、人生で起きた悲惨な出来事にかかわる肯定を三つに分類して考察した。すなわち、a) サバイバルの肯定、b) トラウマの経験を持つことの肯定、c) 悲惨な出来事が起きたことの肯定、である。これらのうち、もっとも大事なものは「サバイバルの肯定」であり、我々はこれをまず第一に達成することの尊さを認識しなくてはならない。また誕生肯定においては、人生の破断をもたらした悲惨な出来事が将来にわたって二度と繰り返されないことを願うことが前提となるが、ニーチェの永遠回帰の思想はそのようには考えておらず、この点においてニーチェは批判されなくてはならないと結論した。

(4) アニメイトド・ペルソナ概念の提唱

本研究のプロセスにおいて、かねてより私が提唱していた「ペルソナ」概念に、新しい展開

があった。ペルソナとは、そこに人がいるとしか思えないような何ものかの到来であるが、その何ものかは全宇宙の環境や文脈によってアニメイトされて(活性化されて)到来するという発想を得た。この活性化機能に着目して、これを「アニメイテド・ペルソナ animated perona」という名で再定義した。そしてこれを田辺元や和辻哲郎らの京都学派の哲学と照らし合わせて、彼らのなかにその萌芽を見るという研究を行ない、Morioka (2021) “Animated Persona: The Ontological Status of a Deceased Person Who Continues to Appear in This World”として刊行した。現代日本哲学から発せられた哲学の新概念として今後さらに考察を深めていく予定である。

以上に加え、「人生の意味の哲学」国際会議の企画委員会の一員として、第3回バーミンガム大会(2020年)、第4回プレトリア大会(2022年)、第5回東北大会(2023年)の企画と開催に携わり、人生の意味の哲学の領域の国際的議論の発展に寄与することができた。また、それらの大会の成果報告集を、私が編集長を務める *Journal of Philosophy of Life* にてオープンアクセスで刊行した。

これらの研究成果をもって、当初の研究計画で意図されていたことはおおむね達成できたと自己評価している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 森岡正博	4. 巻 12
2. 論文標題 仲井によって提唱された被産性の概念について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代生命哲学研究	6. 最初と最後の頁 148-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 13
2. 論文標題 Artificial Intelligence and Contemporary Philosophy: Heidegger, Jonas, and Slime Mold	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Philosophy of Life	6. 最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 12
2. 論文標題 Is It Possible to Say 'Yes' to Traumatic Experiences?: A Philosophical Approach to Human Suffering	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Philosophy of Life	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 14
2. 論文標題 Hermitism and Impermanence: A Response to Nagasawa's Argument on Transcendentalism in Medieval Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 European Journal for Philosophy of Religion	6. 最初と最後の頁 239-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 13
2. 論文標題 The Concept of Painless Civilization and the Philosophy of Biological Evolution With Reference to Jonas, Freud, and Bataille	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Review of Life Studies	6. 最初と最後の頁 16-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 12
2. 論文標題 What Is Antinatalism?:Definition, History, and Categories	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Review of Life Studies	6. 最初と最後の頁 1-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 What Is Birth Affirmation?:The Meaning of Saying "Yes" to Having Been Born	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Philosophy of Life	6. 最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Morioka	4. 巻 6
2. 論文標題 Animated Persona:The Ontological Status of a Deceased Person Who Continues to Appear in This World	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 European Journal of Japanese Philosophy	6. 最初と最後の頁 115-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森岡正博	4. 巻 11
2. 論文標題 生物進化の哲学と無痛文明	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代生命哲学研究	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森岡正博	4. 巻 6
2. 論文標題 生まれることをどう哲学するか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Arendt Platz	6. 最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横田祐美子	4. 巻 128
2. 論文標題 さらに先へと進んでいくこと バタイユにおける非 知と賭け	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森岡正博	4. 巻 10
2. 論文標題 デイヴィッド・ベネターの誕生害悪論はどこで間違えたか 生命の哲学の構築に向けて (1 2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代生命哲学研究	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森岡正博	4. 巻 10
2. 論文標題 反出生主義とは何か その定義とカテゴリー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代生命哲学研究	6. 最初と最後の頁 39-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Masahiro Morioka
2. 発表標題 Animated Persona and the Existence of Dead Persons
3. 学会等名 Grief Project Lecture Series, York University (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masahiro Morioka
2. 発表標題 Manga Introduction to Philosophy and the Concept of Animated Persona
3. 学会等名 UJ Philosophy Colloquium, University of Johannesburg (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masahiro Morioka
2. 発表標題 Painless Civilization: A Philosophical Investigation into Human Desire
3. 学会等名 A Common Horizon for Humanity and the Planet, Cappadocia University (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masahiro Morioka
2. 発表標題 Is Birth Negation Held by Atheistic Antinatalists a Kind of Religious Belief?
3. 学会等名 First Global Philosophy of Religion Project Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masahiro Morioka
2. 発表標題 A Traumatic Rupture in Life and the Affirmation of Having Been Born
3. 学会等名 4th International Conference on Philosophy and Meaning in Life (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森岡正博
2. 発表標題 善から悪が生成されることは悪なのか？ ベネター型の反出生主義が孕む内在的陥穽の研究
3. 学会等名 応用哲学会第12回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masahiro Morioka
2. 発表標題 What Is Birth Affirmation?: The Meaning of Saying 'Yes' to Having Been Born
3. 学会等名 Third International Conference on Philosophy and Meaning in Life (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Masahiro Morioka (ed.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Journal of Philosophy of Life	5. 総ページ数 115
3. 書名 Philosophy and Meaning in Life Vol.4: Selected Papers from the Pretoria Conference	

1. 著者名 森岡 正博	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 生まれてこないほうが良かったのか？	

1. 著者名 Masahiro Morioka (ed.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Journal of Philosophy of Life	5. 総ページ数 133
3. 書名 Philosophy and Meaning in Life Vol.2 : Interdisciplinary Approaches	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	横田 祐美子 (Yokota Yumiko) (30844170)	立命館大学・衣笠総合研究機構・助教 (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
南アフリカ	University of Pretoria			
英国	バーミンガム大学			